

日本画における伝統と革新

— 屏風制作からの視点 —

森山 知己

倉敷芸術科学大学芸術学部

(2022年10月1日 受理)

1. はじめに

何世代にも渡って継承されてきた様々なものが、生活様式の変化やテクノロジーの進歩によって更新され、役目を終えたものは失われていく。日常に見られる当然のことだ。異論はあるにしろ、社会において伝統的絵画というイメージを長年保持して来たと思われる日本画についても例外ではない。長年使われてきた材料や表現形式、技法など、これまでも人の暮らしや社会の様相に合わせて否応なく変化してきた。

屏風が日本絵画、もしくは日本画の代表的な形状であると考えていることに異論は無いだろう。しかし近年、屏風による発表が頓に少なくなったように見受けられる。屏風以外にも掛け軸や巻物なども同様であり、一般に表具、もしくは表装と呼ばれる形状による制作、発表自体が減っているのだ。その理由として大きいのは、やはり作品の発表、展示会場の変化だろう。同時に住環境の変化も含め、こうした表装文化と作家が日常生活において触れ合う機会を失ってきたことも大きいと考えられる。表装は、作業の多くが職人による徒弟制度、口伝によって継承されてきたが故に、これら表装文化は、携わる表具師の栄枯盛衰に依存する。近年の社会の変化により表具師はその活躍の場を次第に狭め、失ってきたのだ。存続が危ぶまれるのが実情である。

学生が屏風を用いて制作発表を行うことは言わずもがなである。大学の保存修復学科等に所属しているなど特別な例を除いて、日本画を学ぶ学生が屏風自体に触れることも少なくなった。

飾る住環境の変化によるところが大きいであろうことは容易に想像できるが、この他の理由として支持体としての屏風が、近年多くの発表に用いられてきた木製パネルなどに比べて著しく高価であることも関係するだろう。パトロンから制作における支持体として屏風が提供されることも現在ほぼなくなったと思われる。この高価である理由については、制作における工程の多さ、職人仕事によるいわゆる工賃、技術・人件費によるものであることを実際の屏風制作作業を体験することによってはじめて理解することができた。

かつての日本絵画、もしくは日本画における何を伝統と定義するのかについては、他の論考に求めたいが、たとえ少数であったとしても、守りたいもの、大切にしたい事柄の存続について、継承可能なのは何かを明らかにし、その具体的手立てを考えること、また変化する社会が受け入れられる新しい存在としてそれらを再生し、作り出すことが、受け継ぎ、次の世代に何らかの可

能性を残していく上で重要であると筆者は考える。

2. 倉敷芸術科学大学における屏風制作の取り組み

2018年、倉敷芸術科学大学芸術学部では、同大学COC事業（注1）である「倉敷未来プロジェクト」の一環として、倉敷市美観地区で毎年10月の第3土・日曜日の阿智神社祭礼に合わせて開かれる「倉敷屏風祭」に、岡山県表具内装協会の指導協力を得てデザイン芸術学科に学ぶ多様な学生自らが屏風を制作し、それに絵を描いて参加する取り組みを行った。大学COC事業が終了した翌2019年も同様の取り組みを継続して実施することができた。その後2020年より新型コロナウイルス蔓延防止の観点から、外部からの指導者を大学に招き入れることができなくなり、直接指導を受けることができない状況となったが、活動の継続性から、直接指導を受けられた2018・19年の2年間に渡って筆者が覚書として残した作業メモを手がかりに、筆者と日本画を学ぶ学生のみで制作を継続することにした。メモを元に作業、また工程を整理した簡単な作業



マニュアルをまず作った。その後、制作作業を行いつつそれを整備し、不明なこと、新しいチャレンジを行う度に、電話等リモートによるアドバイスを表具師の方々より受けて、マニュアルを充実させるとともに屏風制作の継続を大学内部のみで行っている。この取り組みは5年を経過した今年（2022年）も継続している。

「倉敷未来プロジェクト」とは、地域を知り、また地域の課題解決に取り組むことを通じて地域愛を育てる取り組みである。地域に実際に出て取材を行い、特徴、魅力を発見し、それを絵画として構想し制作する。地域の方々とも触れ合う。同時に支持体としての屏風制作を手がかりに、和紙や表具、素材や伝統的な形状にふれる。地域における「まつり」の意味を考え、アートによって地域活性化にどんな事ができるかを考える取り組みとして「倉敷屏風プロジェクト」は企画された。また地域における伝統の具体的継承の形を探し出し、作り出すといった側面も期待される試みである。はからずもより広い枠組みではあるが日本文化と表装、日本画と屏風といった関係について、また今、何が筆者にできるかを考える契機となった。

3. 屏風制作指導者の確保

屏風はとても高価であり、出来合いであっても購入することは予算面から難しい。また当然のことながら表具師に描いた絵を屏風として仕立ててもらうことはより予算的に困難である。表具材料を扱う関係者に屏風制作における材料代のみの値段を聞いたところ、学生たちによる今回の取り組みでも可能であることがわかった。自分たちで支持体としての屏風自体を作る。屏風制作を教えてくれる表具師あってこそ初めて実現する企画である。屏風制作指導を行ってくれる表具

師の確保は、今回の取り組みの最重要課題であった。

2016年、岡山県表具内装協会により長らく後楽園鶴鳴館で行われてきた「表具美術展」の第48回会場で、関係者より第50回（2018）を区切りに本展覧会を休止するかもしれないという話を聞いた。30年前に130軒を越えた協会員も13軒（2017）となり、展覧会出品者の確保でさえままならない状態となっていたのだ。

当時、日本画の多様な和紙素材への興味から、筆者はここ岡山における和紙の産地を訪ねていた。表具と同様に和紙製造の現場、和紙漉きの実態も同じく、後継者が無く、また安定な原材料の確保も難しい現状があった。どちらも日本画や書道といった日本文化を継続していく上で強く関係する事柄であることは言うまでもない。

和紙は作品制作の支持体としてだけではなく、裏打ちといった補強や装飾といった表具全般に関係する。もちろんそこには組み立てたり分解したり、長期に渡る保存や、活用・継承の仕方、表具そのものの意味にも密接に関係するものである。この問題についての発信を筆者の関係する岡山県天神山文化プラザでの企画にしたいと、和紙や表装、表具に関する組み合わせを多々考える中で、表装を日本画や書道といった容易に想像できる組み合わせではなく、新たな出会いとして現代美術のフィールドで活躍する若手作家との組み合わせで行おうと考えた。なぜなら現状は、書や水墨、日本画が往時のような表装との関係性が続いていないからこそその結果であるからだ。古より伝統の新たな再生と輝きは、異質な存在と出会い、交わることによって行われてきた。和紙、表装の文化と新たなユーザーとの出会いを作り、新たな領域からの情報発信、ユーザーの獲得を試みることにしたのだ。

岡山県表具内装協会の方々へ企画趣旨を説明し、賛同、了解を得られた。また現代美術作家の方々からの賛同も得られ、2017年岡山県天神山文化プラザ「アートの今・岡山」の企画展として「表装」展が開催された。このおり、同協会による掛け軸制作の一貫したデモンストレーション（長期間かかる工程を、料理番組のように各段階のモデルを作り置き、一日ですべて見せる工夫が行われた）の実施や、屏風制作の紹介が行われた。長く続いてきたそれぞれのことを、既知のこととせず、多くの方々に知ってもらうことに対する動きを本格化させたのだ。

それぞれの制作技術の公開のおり、同じ協会員、表装技能士といえども、用語の違いや、作業などに違いを見ることになった。修行した場所、その地域なども関係するらしい。徒弟制度に由



来するであろうことは容易に想像できた。表具を学ぶことの難しさの一因とも考えられる発見となった。

展覧会は大変好評で、地元新聞で何度も取り上げられ、社会的な発信となった。また、参加した表具師の方々からも未来に向けたかすかな希望といった言葉を聞くことになったことは嬉しい記憶である。

この展覧会を共に作り上げる過程でできた信頼関係

から、倉敷芸術科学大学で取り組むこととなった「倉敷屏風プロジェクト」への指導協力要請を行うことができ、了解を得て一番のポイントであった指導者確保が実現した。

本来、職人の多くは自分たちの技術の公開を好ましく思っていないと聞く。特に徒弟制度で学び身につけた技術は、食べていくこと、稼ぎと直結した仕事上の貴重なノウハウであるからだ。よって、こうして大学で広く学生に指導することについて当初いぶかる声が協会内にあったと聞いた。そんな中、本学において屏風制作指導を実施したのは、会長他、指導にあたった表具師たちのより大きな危機感が根底にあったからと思われる。

表具師から指導を受けたおりに、後継者不足、また業界の現状、先行きに対する不安の声を聞くことがあった。それらがもたらす結果は、日本画を描く我々が将来屏風を作ってもらふこと、掛け軸や巻物などの仕立て、表装の存在が身近から無くなることを意味している。まずは、屏風という存在を新たなユーザーとなる可能性をもった若い学生に知ってもらうこと、屏風制作体験を行うことで表装の世界に実際に触れてもらうことを優先したのだ。

4. 屏風制作の広がりとはマニュアル化について



大学で行った屏風制作の過程では、用いる素材のみならず、それぞれの道具の使いこなし、技術の意味といったものに直に触れることができた。また同時に興味深い日本文化にも出会うこととなった。例えば屏風、襖に求められてきたそれ自体が発する音のありようや、関東と関西の屏風の重さ、縁の太さなどにまつわる価値観の違いについて、また砂子箔などの接着に

おける糊の扱いや、再生紙による胴張紙の吸水性、屏風の櫓に見られる今昔、現代への対応などもあった。日本文化を捉える上で大変興味深い要素であるが、このあたりについては今後の他者による論考を期待したい。

2018、19年と芸術学部に学ぶ多様な学生の参加によって行った「倉敷未来プロジェクト」における「倉敷屏風プロジェクト」は、2020年初頭より新型コロナウイルス蔓延による大学と外部の隔離、また人が密になることからの回避を余儀なくされた。そのため継続可能な実施形の選択と同時に、屏風作品自体としてのクオリティーアップを目指して、筆者と少人数の日本画を学ぶ学生のみで屏風制作継続を行ったのだが残念ながら「倉敷屏風祭」は2020、21年と開催されず、屏風制作は行ったものの祭りでの屏風発表はできなかった。

しかし、屏風制作を授業課題の一部とすることは、日本画制作における支持体としての今日的な見直し（畳むことでコンパクトになる。軽い。自立し、飾るおりに壁を必要としない。描く紙素材、絹など多様な選択肢がある。今日的な空間表現における提案となる）に繋がり、卒業制作、修了制作における支持体としても多数選択され、また博士論文研究にも取り上げられること

となった。

同時にこの間に作られ蓄積された屏風群（25 隻）によって 2022 年 7 月から 9 月にかけて倉敷市内 4 箇所を会場に「倉敷四方屏風展」を開催することができた。この展覧会は、長い年月、地域に変わらぬ姿で存在し、歴史を重ねてきた建築物という今と昔、人の暮らしの風景をつなぐ存在に、若い学生が今を生きる感性で描き出すアート、人が作り出すワクワクする気持ちを、屏風という古くから建物と絵画をつないで来た形の上に描いて持ち込むことで、屏風が昔と今を結ぶ一つの装置になりうるという提案企画として行った。この「倉敷四方屏風展」の反響から、11



月の岡山県後楽園企画での屏風展示に繋がり、また継続的な取り組みを認めていただき 2023 年 1 月の今治市大三島美術館での「屏風・BYOUBU 展」へと広がりを見せている（注 2）。

この活動が日本画支持体としての屏風への見直し、表装文化に関する情報発信につながればと考える。

5. おわりに

本稿では、これまでの本学日本画研究室における屏風制作研究の取り組みを紹介した。そして、屏風制作作業を整理し、大学生のみでも制作可能なガイドとしてマニュアル化を行った。一般的な屏風の扇最大数である六曲をテーマとしてまとめることで、屏風の大小、また扇の数の違いなどを吸収し応用可能とした。さらに制作する屏風に応じて、必要となった技術等をその都度追加記録して整備し作り上げることができた。これらの研究の成果物として、「倉敷芸術科学大学版屏風制作マニュアル」を本稿の〔付録〕で紹介し、今回初めて公開するものである（注 3）。

この本屏風制作マニュアルの公開が、日本画を今日的視点から問い直すこと、また屏風普及、理解、技術継承への一助、ひいては表装文化の継続へ向けた一助となれば幸いである。

【注】

- 1) 倉敷芸術科学大学 COC 事業 平成 26 年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業として採択された。倉敷芸術科学大学とくらしき作陽大学の 2 大学が倉敷市と強力で連携し、文化を支える倉敷に根付いた人材を育成することで、その成果を地域へ還元を目的とする事業。
- 2) 2022 年 8 月 11 日：感性光る「四方屏風展」山陽新聞
 2022 年 8 月 16 日：芸科大生ら作品展示 倉敷 4 会場に 斬新、びょうぶの概念一新 山陽新聞デジタル
 2022 年 8 月 16 日：自由な発想で制作した大学生のびょうぶ絵展 倉敷市 NHK 岡山
 2022 年 8 月 16 日：歴史的建造物を学生たちの屏風で飾ろう 伝統美と新たな感性が融合する「倉敷四方屏風展」RSK 山陽放送
 2022 年 8 月 20 日：屏風アート 感性キラリ〈倉敷〉読売新聞
 2022 年 11 月 23、24 日：倉敷芸術科学大学 後楽園屏風展 後楽園鶴鳴館 岡山県郷土分財団
 2023 年 1 月 1 日～2 月 26 日：屏風・BYOUBU 展 今治市大三島美術館
- 3) 屏風制作マニュアル作成の主要メンバーは、原田よもぎ（本学大学院芸術研究科博士課程 3 年）、潮嘉子（同大学院芸術研究科修士課程修了）大橋裕子（同大学院博士課程修了、博士〔芸術〕）および同大学日本画研究室の指導教授、森山知己（筆者）である。

【謝辞】

本稿の執筆および付録の「倉敷芸術科学大学版屏風制作マニュアル」作成にあたり、全体指導にあたってくださった鳥越会長、三宅氏、小村氏、岡山県表具内装協会の皆さん、白神紙商店の白神清宏氏には多くのご教示をいただいた。また屏風展に関して、「アートのまち倉敷」実行委員会、岡山県郷土文化財団、岡山県天神山文化プラザ アートの今・岡山 2017「表装」展実行委員会、今治市大三島美術館には多大なご協力をいただいたことに深く感謝します。加えて、本稿執筆にあたり、倉敷芸術科学大学・松岡智子教授には執筆への激励、並びに助言をいただいたことを書き添え謝辞といたします。

Tradition and innovation in Japanese painting

— Viewpoint from folding screen production —

Tomoki MORIYAMA

Faculty of Arts,

Kurashiki University of Science and the Arts

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2022)

Various things that have been handed down for generations are updated by changes in lifestyles and advances in technology, and things that have finished their roles are lost. It's a natural thing to see in everyday life. Nihonga, which seems to have maintained the image of traditional painting in society for many years, is no exception. It is important to clarify what you want to protect and cherish as traditional painting. At the same time, it is also important to think about the specific measures necessary for the continuation. The author believes that it is important to revive the things that we want to preserve as a culture in a form that can be accepted by the changing society, and to recreate them in a new form in order to continue the tradition for the next generation.

There is no doubt that folding screens are a representative form of expression in Japanese paintings. In recent years, however, there has been a sudden decline in the number of presentations in the form of folding screens. In addition to folding screens, the same applies to hanging scrolls and scrolls, and production and presentations in the form of expression generally called mountings are decreasing. The main reason for this is probably the change in the place where the works are presented and the exhibition venue. At the same time, changes in the living environment have also contributed to the loss of opportunities for artists to come into contact with mountings in their daily lives. Due to social changes in recent years, the field of activity for Hyogu craftsmen has been gradually narrowed and lost. The reality is that its survival is at stake.

Since folding screens are expensive, young artists cannot use them in their productions. The author would like to cherish the technique of mounting that makes the shape of a folding screen usable, and the culture that uses it. It is important to have an environment where students learning Japanese painting can actually draw pictures in the form of folding screens and experience the culture of mounting. The author came up with a plan for young artists to create and present works using the form of expensive folding screens. In this project, students make their own folding screens with only the cost of materials, with the guidance and cooperation of mounting craftsmen. The author was able to make a manual for folding screen production from this record of folding screen production.

This time, we will publish the record of this effort and the folding screen production manual used for production. The author hopes that this will lead to the continuation of Japanese culture and the protection of the technique of mounting.